

北海道遠征・利尻山山スキー報告

【山城】北海道利尻島・利尻山（1721m）

【行程と天気】2016年GW

4/28 千葉—新潟

4/29 新潟 10:30—フェリーで小樽へ

4/30 小樽着 6:00—札幌国際スキー場ゲレンデ（午前中滑走強風・ガスで視界不良・ゴンドラトップ—5℃）—一般道で北上—オロロン街道—道の駅「初山別」（温泉・夕食）—天塩道の駅（テント泊・強風）

5/1 道の駅「天塩」2℃—稚内 6:40—フェリー—8:20 利尻島鷺泊港—北麓野営場駐車場—シール登行—左股 800m—滑走—右股 860m—滑走—駐車場—利尻島一周ドライブ—利尻富士温泉入浴—ファミリーキャンプ場「ゆーに」テント泊 曇り上部はガスで視界不良、やや低温、山頂の最高気温予想—4~—5℃

5/2 北麓野営場駐車場 5:30—右股—950m 位からアイゼン登高—1100m でスキーデポ—長官山—利尻山小屋—13:28 標高 1600m—長官山—1100m より北西急斜面滑走（標高差約 350m）—右股滑走—16:00 駐車場—キャンプ場泊 晴れ風弱し、山頂での最高気温・最大風速予想 —2~—1℃、10m/S

5/3 キャンプ場—鷺泊港 8:50—フェリー—10:30 稚内—道央高速—小樽—道の駅「赤井川」テント泊

5/4 小樽 10:30—フェリー—新潟へ

5/5 7:10 新潟着—新津 9:35 —磐越道—常磐道—15:30 千葉(渋滞なし)



【利尻山スキーの立案】

・登山に夢中になり始めたのは 23 年ほど前の 1993 年頃で、その後は深田久弥の「日本百名山」を一つ一つ登頂することを目標として精力的に山行を重ねた。山スキーを本格的に始めたのは約 20 年前であり、アルペンからテレマークに転向したのが 18 年前である。百名山の中、山スキーで行けそうな山は、できるだけ山スキー仕様を目論み、20 座ほどを登頂・滑走できた。10 数年前ネットで調べてみると、山スキーができる離島として利尻山・佐渡金北山・屋久島宮之浦岳が記録として掲載されており、少なからず興味が湧いたが、これらの離島での山スキーは小生にとっては夢の夢であった。

利尻山は 2003 年 6 月 29 日にまさに百名山目に登頂できた。その時に山頂直下のカール状急斜面に大きな雪渓があり、滑走したら気持ちがいであろうと考えたが、その時にはまさか将来自分が本当に山スキーの対象として再び利尻山を訪れるとは想像できなかった。

・GW には例年山スキーヤーは北アルプス・上信越・東北の山々など残雪期の山スキーを楽しむ適期であり、わがちば山の会でも例年、大勢でこれらのエリアで楽しんでた。しかし近年、メンバーの高齢化、私自身 67 才という年齢に達し、体力・気力の低下を実感しつつ、ハードルートを計画することが億劫になっていた。それでもなんとか少しでも GW の春山スキーを楽しみたいと考えていたが、今年の本州での雪不足は極端であり、立山・乗鞍・月山・鳥海山以外は難しい状況となっていた。そこで北海道、特に利尻・増毛地区は例年通りの積雪であろうと、それらの役場に電話をかけ情報を頂くと予想通り、例年通りの十分な積雪量ということであった。長年、頭の片隅に眠っていた夢の離島山スキー、それも利尻山での山スキーが一気に現実化した。近年、利尻山での BC は盛んになっており、ガイドツアーなど厳冬期から入山している。登頂 BC は 4 月中旬から GW 位までが適期であり、ネットにはかなりの報告が掲載されていた。標高は 1720m であるが、3000m 級の北アルプスとほぼ同じ位の山岳状況と考え、安定した気象条件であれば登頂も可能である。

・メンバーの選択は気の合った山スキー上級者、新潟の山スキー仲間をメンバーとして考え誘ってみた。新潟から小樽までフェリー、利尻島でのレンタカーは高額のようで、かなり費用がかさむが利尻島へも自車を載せて渡ることとして費用を試算し、行動計画を立案した。お誘いしたメンバーは初め、ビックリするものの、皆さん興味があり 3 名は早々と決定した。宿泊はすべてテント泊とし、道の駅・温泉施設・コンビニ・マーケットなど調べることが多い。持参する衣類・レトルト食品などかなりの量になった。最終的に私の妹の旦那の伊藤さんと上越市の N さんの 3 名がメンバーとなり詳細を決定。直前に N さんの都合が悪くなり、二人の弥次喜多道中となった。

・例年 GW の頃の天気は不安定で、主目的の利尻山アタックの日をいつにするか、週間天気予報・山岳予報と睨めっこの毎日であった。新潟から小樽へのフェリーの 29 日は動かせない。小樽到着の 4 月 30 日から帰りの小樽発 5 月 5 日までの日程は天気予報では 5 月 1 日~3 日が晴れベースで 2 日が最も安定した日和であった。利尻島 2 泊の前後、黒岳と暑寒別の 2 ルートも準備していた。

【新潟~小樽】

・GW のため出港一時間半前までにフェリー乗船の手続きを済ませねばならない。自車がフェリーに乗るまでかなりの時間を要し、出港 15 分前くらいにツーリスト B の 2 段ベッドの船室に入ることができた。荷物を整え 4 F のラウンジ? に向くと、山スキーグループらしき方々が早くもプチ宴会ムードである。

声をかけてみると都職の方々（松戸山の会の方もいる）で案の定、山スキーで大雪・十勝方面とのこと。隣の席と一緒にビールを飲みながら、山スキー談義に花を咲かせると、芋づる式に共通の山スキー仲間 3 人ほどの名前が次々と出てきて「ビックリポン」である。「この世界、狭いね」とお互いに納得しあった。

【小樽~稚内】

・30 日小樽に早朝着、寒気による道東を中心にした降雪はほぼ北海道全土にある程度の降雪をもたらし、低温・強風で悪条件、小樽から 40 分ほどの札幌国際スキー場で午前中だけ滑走した。スケールの大きいスキー場でグランドシニア券（65 才以上）を購入して、標高差 550m ほどの Gondola 3 本分を楽しんだ。この時期想定外の 15 cm 前後の林間パウダーランが楽しめた。



・午後から最短距離の一般道、オロロン街道経由で延々と海岸に沿って北上した。道の駅は比較的整備されており、温泉付きもある。道の駅「初山別」で温泉とフグの照り焼き丼を食べ、日本海に沈む夕日を眺めた。天塩の道の駅に夜 8 時過ぎに到着、強風の中、北海道初日のテント泊となった。

【稚内~利尻】

・1 日は稚内から利尻への 6:40 発の一番のフェリー乗るべく出発、無料の高速道路並みのバイパス経由、1 時間半弱でフェリー乗り場に到着した。天気は回復予想であったが、曇天・低温、波も 3m（めったに欠航とはならないが 4m 以上の波では決行の可能性ありとのこと、大分心配した。）とかなり高く、酔い止めをあらかじめ服用して乗り込んだ。



利尻島鴛泊港までは 1 時間 40 分、島に近づくと上部が雲

は否応なしにアップした。

上陸後は早速、北麓野営場に偵察に行った。先行グループ（ラ・ランドネ）がトイレ・水場などを探していたが見つからない。利尻富士温泉前のファミリーキャンプ場「ゆーに」が今日オープンしたばかりとのことので我々もそこにテントを張りベースとすることとした。

時間が十分あるため、曇りベースではあるが標高 800m ほどまで行くことを考え出発、緩やかな松（トドマツ・エゾ



松)の原生林にスノーモービルなどのトレースがあり、GPSに設定したルートと同じことを確認して、そのトレースを辿ってシール登行した。数cmの新雪は徐々に増え、開けた台地に到達する頃には10~15cmとなっていた。上部はガスに覆われて見えないが左俣方面が見える。振り返ると海が見えるようになっており利尻島に来たのだなあ感慨ひとしおとなってきた。無木立の左股を詰めると徐々に急になり、下地もやや硬くなってきた。標高800mほどから、利尻山初滑走を行った。ややパックされている感じもあるが、まあまあ滑りやすいパウダー、テレターンで慎重に滑走、海を見ながら快適なファーストランであった。右股との分岐部まで滑り今度は右股をシール登行、はじめはやや狭いが、上に行くにつれ広く緩やかな右股斜面が上方に続いている。860mほどまで登りあげ2本目のパウダーラン、スキーヤーズレフトの広大な大地、礼文島まで見渡せるグレイトビュー、累計標高差は約900m、この2本でもうすっかり利尻山スキーを100%、楽しんだ気になれた。



左俣滑走



相棒も快適に飛ばす



右股滑走

・駐車場に戻ったのは15:00前、まだ十分時間はある。島一周60kmあまりのドライブをして、セイコーマートで酒とつまみ、明日の行動食を購入し、キャンプ場でテントを張り、利尻富士温泉で入浴というタイムスケジュールを立て出発した。天気は一気に回復、神々しい真っ白で急峻な利尻山に驚嘆と感動の歓声を上げたが、内心、果たしてあんな厳しそうな山頂に登頂できるのか、まず無理であろう。そしてあんな急斜面の滑走は大丈夫か、



天気回復 神々しい利尻山



見る方向により山様が異なる

雪質はどうなのか、などなど不安材料で頭の中は一杯になってしまった。海岸線に沿った一周道路からみる利尻山は凄まじい迫力であった。利尻島自身、すべて火山島であり、各地点から眺める山様はかなりの変化が楽しめる。

駕泊ルートのほか3日に計画していた雄忠志内からの豊漁沢ルート方面も眺めてみた。

キャンプ場では明日の ATTACK に備え体調を整えるべくマイテントを使用した。放射冷却で冷え込みが厳しく、目覚めてみると咽頭痛が出現していた。

・2日のルートは長丁場、5時スタート予定であったが、30分ほど遅れて北麓野営場の駐車場を出発した。申し分ない好天気、順調に台地に到達するとテントが2張あった。(後でわかったが、札幌からのボーダー2名で毎年利尻山滑走を楽しんでいた強者 <http://freeride.7days.tv/index.html> であり、今回も登頂滑走を成功させた) 無風・雲一つない紺碧の青空、先行者は右股を進でいたが、われわれは昨日のトレース



が残るオーソドックスな左俣を進んだ。

昨日の 800m 地点を通過しやや傾斜が緩む地点で振り返ると、礼文島まではっきり見通せるグレイトビュー、登山者2名が徐々に急になるカール状斜面を昨日のトレースを追っていた。このままシール登行が暫く可能であると思われたが、しばらく進み傾斜がやや急になると、下地がやや硬くシールの効きが悪い、950m 付近からアイゼン登高に切り替えた。すぐに相棒のアイゼンの調子が悪くなり、調整に戸惑ったが、焦らず直して、その後は順調にトレースを追って右方向の尾根に乗り上げた。尾根はかなりの急斜面、最近の降雪で藪はほとんど埋まっているが凸凹、深い新雪部分もありかなり難儀しながらエネルギーを消耗し傾斜の緩んだほど尾根に到達した。相棒は腰に負担が掛かりかなりへろへろ、絶好の日和になるべく高度を上げたい。せいぜい長官山から小屋あたりまでは行きたいと考え、また上部の滑走への不安もあり、標高 1100m 付近でスキーをデボすることとした。軽身になると調子は良い。長官山 (1218m) に到達すると山頂方面の迫力ある広大な眺めが目に飛び込んできた。



写真撮影をしながら稜線を 1250mP まで進んだ。目を凝らすと、山頂直下のすごい急斜面にスキーヤーが飛び込んできた。かなり慎重に下っているが、見るだけでハラハラ、手に汗を握る、止り止りしながら少しずつ高度を下げているようだが、なかなか下降しない。漸く安全地帯の方向に入って一安心した。
(長野から単独でやってきた素晴らしくテクニカルな 53 才の方である。昨日キャンプ場で隣り合わせて、声をかけてみると、なんと数年前、戸隠スキー場でクワッドリフトの隣に乗り合わせお話ししたとのこと、小生を知っていたとのこと)



長官山の稜線に達しやれやれ



頂上直下の迫力の急斜面を一人滑っている

相棒はもともと山屋、利尻山初挑戦でもあり、ヒシヒシと登頂への意欲が再燃した。時間的にぎりぎりか、利尻小屋を順調に通過しピッケルを手にして、徐々に急になる登山道ルートの高さを上げた。山頂が間近に迫ってくる傾斜が急になってくると下地がかなり固くなっており、踏み跡を辿るが、しっかり前爪でけりこみながら一步一步、呼吸を整えながらの登りとなった。



大迫力の山頂付近



まさに冬の北アルプス同然

1600m 付近のやや平坦な地点でラ・ランドネの A 夫妻が滑走準備していた。われわれの登場にびっくりしたようで「よくやりましたね、頑張りましたね」と老体をいたわってくれた。談笑を交わし、記念撮影、



下界はこんな感じ



1600m付近

もう一人の T さんのみボーダーと一緒に登頂しまさに山頂からの急斜面を滑走中であった。すごい急斜面の海の向こうに北海道の陸も見える迫力のショットが撮れた。A さんから、この上はかなりアイシーで登山者が後ろ向きで下っていたとお聞きし、時間的にも体力的にも無理と考え、ここから下ることとした。



・しばらくの間は、やや硬い急斜面のアイゼン下降、ピッケルを突き刺しながら慎重に下り、安全地帯で



ピッケルをしまい利尻小屋の来ると一安心、先ほどのボーダーのエールを送り 1250mP まで登り上げた。高曇りで風がかなり強くなってきており、1250mP の直前では早くもウィンドクラスと始めている。これはヤバイと考えつつ P に達すると、雪質は柔らかいままでありほっとした。おそらく日当たりがよく、表面が解けたところだけがクラストし始めていたのだ。長官山の 1218m から細尾根を少し下り、スキーズポ地に 15:15 くらいに到達、時間的にかなり遅くなっていたが雪は固くなっておらず大丈夫である。滑走は、右股に下る北西の急斜面、稜線付近はハイマツが少し顔を出しているが、ほんの数 m その間を斜滑降で進むと快適そうな広大な急斜面、雪が飛ばされた薄茶色の部分はザラメ、新雪部分は 15 cm ほどのやや重くなった湿雪、アルペンの大回りで慎重に繰り返した。雪崩の心配はまずない状況であったが、滑走により発生した 20~30 cm ほど

の雪玉が数個、滑走スピードとどちらが早いのかという速度で追ってきた。ほとんど斜度の緩まない標高差

約 350m の大滑走であった。先ほど談笑したボーダーは 1250mp から急斜面を下り、右股の沢地形を先行して滑走していた。



さあ、あとは中斜面・緩斜面主体の長い右股滑走、湿雪となりややターンしにくい雪質となったが、利尻山最後の滑走、海を眺めながらゆっくり楽しみながら下った。台地に到達すると、ボーダーがテントを撤収し始めていた。再び談笑を交わし、一足先に駐車場に向かった。駐車場に着くと、単独の方に声をかけられた。「昨年まで 2 回連続敗退しているが、明日登りたい」「明日は風がかなり強いようで気を付けてください」と話した。





・利尻富士温泉（入浴21時まで、レストラン20時頃までOK）で余韻に浸りながらゆっくり汗を流し、施設内にあるレストランでラ・ランドネ（<http://www.la-randonnee.org/menu.html>）の方々と生ビールで乾杯、つまみ数種、カルビ丼で夕食兼、宴会で盛り上がった。途中から長野の強者テクニシャン（<http://aoaao.cocolog-nifty.com/>）も加わり、生ビールは3杯に達し、閉店直前まで山スキー談義に花咲いた。

【利尻～稚内～道央道～小樽～道の駅「赤井川」】

・5/3は雄忠志内から豊漁沢川を遡るルートなどを考えていたが、風が強くなり中止、予約していた夕方のフェリーでは風がさらに強くなり条件が悪くなることを考え、8：50発の一番のフェリーで稚内に向かうこととした。一間ほど余裕があったため、標高92mのペシ岬のトップに登ったが、風速20m(?)を越える暴風に耐風姿勢で記念撮影し紫色の「エゾエンゴサク」の群落を楽しみながらフェリー乗り場に向かった。



フェリーの中で、ラ・ランドネの方々、ボーダーの二人と興奮冷めやらぬ状態で、車座になり BC の話に盛り上がった、気が付くと離れていく利尻島が山頂に雲がかかり、幻想的に我々を見送ってくれた。稚内で道の駅に付設した副港市場で、遠征中初めての贅沢をして海鮮丼をいただき、奮発してお土産のカニをわが家に送った。

帰りは高速道路の道央自動車道経由、打って変わって夏日となり半袖 OK。大雪・十勝の真っ白い山々が見



えると、次回はそちらにも GW に来てみたいと、早くも次回の北海道遠征に思いを馳せた。

小樽に到着し宿泊の道の駅を探してみた。まず余市の「スペース・アップルよいち」によって見たが、狭いスペースと満車でらちが明かない。頑張っ

て道の駅「赤井川」まで行ってみると、山間の広いスペースに数台駐車しているのみである。テント泊にも良い草地があり安眠できた。北海道には道の駅が多数あるが、広く素晴らしい施設の揃ったところが多いが、間に合わせ的に既存施設を「道の駅」としたところもかなりあり、前もって調べておいた方が利用しやすい。

【小樽~新潟~千葉】

5月4日は悪天、暑寒別を諦め、一日早くフェリーの予約を変更して新潟に向かうこととした。小樽に向かう途中にキロロスキー場がある。見学をして山道路を下っていくと、雲の切れ間から小樽の街並みの景色を楽しめた。



乗船前はかなり時間があり、上陸した日と同様、「数寄屋」で和定食を食べた。18000 トンあまりの「ライラック」を撮影し乗船した。

行きも帰りもだいぶ波が高くかなり揺れたが、新潟近くになり次第に波も小さくなり天気も回復。5月5日、9:30過ぎ、新津を出発し磐越道―常磐道経由で渋滞なく6時間弱で自宅に到着した。



【次回に向けて】

- ・状況がよくわからない分、食料・衣類など大量に持参しすぎた。食料は、現地調達は全く問題なく衣類も最低限にして車一台で3人分は収容できることが肝要である。
- ・アタック前日の体調管理などのための防寒対策、余裕あるマイテント持参がよい。
- ・この時期の利尻山登頂のカギは、やはり低温過ぎない風の弱い絶好の日和を選ぶ必要がある。